

国際学会で発表したい人のための必読レポート

— オーストラリア国立大学アジア・パシフィック・ウィーク参加者の体験記 —

特集趣旨

国際発信能力の涵養——自分の研究を論文や口頭発表によって国外の研究者や専門家などに伝えることのできる能力を養うことの必要性はますます高まっていると考えられている。本学大学院 GP においても重点的にとりこんでいるプログラムの一つである。たしかに国際発信する能力を身につけることの意義はとても大きい。とりわけ、国外の研究動向を踏まえなければ研究することの意義が薄まるテーマも少ないし、ドメスティックな言説空間のなかに引きこもることは現実的に困難な時代になっているという認識は高まっている。しかし、国際発信をするとは具体的にどういうこと?となるとこれが難しい。教育プログラムに反映させるようなユニークな具体案はなかなか出てこない。そこで、国際発信能力=海外のジャーナルに投稿する、国際学会で発表する、という結果=業績のみに目が行きがちになる。しかしその結果、翻訳することが難しい研究やそれを取り巻くローカルなコンテクストは捨象されてしまう。すでにネットワークのある人びとと知識のみが流通し、固定化してしまうような事態が発生する。しかし、実際に重要なのは、業績の発表にあるのではなく知的共有のプロセスである。つまり、この時代に国際発信することの意義と実際に国際発信だと考えられていることのあいだには、大きなギャップが存在するのである。このギャップゆえに、海外に発信する人とならない人、発信される知識とされない知識が分断されてしまう事態が生じているのではないだろうか。そしてそのことが、国際的な知識の共有・発展にとって大きな弊害となっているとしたらとても残念なことである。

今回本学の院生・研究員が参加した Asia Pacific Week は、中国研究、日本研究、インドネシア研究、南アジア研究、東南アジア研究、環太平洋地域研究という、計6つのアジア太平洋地域研究の分会、およびそれらを横断する共通企画・公開講義から構成されている。このうちわれわれの参加したのは日本研究分会 (Japanese Studies Graduate Summer School)、そして共通企画・公開講義である。つまり、政治学、経済学、社会学、人類学、歴史学、文学、文化研究など様々な学術的領域を専攻する院生たちが地域研究としての日本研究という枠組みによって集合したかたちとなった。しかしながら、それぞれの専攻があるにしる、学際的なアプローチを試みているにしる、参加者たちの置かれたローカルな知をめぐるコンテクストは様々である。例えば、関学の院生・研究員の関心は、移民、エスニシティ、メディア、建築、環境と多岐に渡っているし、研究対象もオタク、日系ペルー人、伊勢エビ漁、まちづくりと様々である。よって、現在のローカルな研究の文脈を翻訳する必要性が発生するとともに、その困難に立ち向かうことになる。このことは、知識がいかにローカルな学術的環境、出版文化、そして言語によって拘束されているのかを明らかにしている。しかしそのような制約があるなかでも、あるいはあるからこそ、自分たちのローカルな知識や文脈を他者へと開き、共有していくためのアリーナを構築することが重要なのである。その意味で、国際発信とは、ヨーロッ

パとかアメリカとかに向けて発信するというような狭い視野のことに限定されるものではなく、自分の狭い世界のなかに滞留するのではなく、外へと知的な関心を向けていく試みなのだと思う。それは知的な好奇心を駆り立てるとても楽しいプロセスだ。

本特集では、これから国際学会やジャーナルなどでの発表を考えている若手研究者が参考にするために、参加者によるレポートを掲載する。レポートは①体験記、②発表原稿によって構成されている。体験記は、ただ単純な感想にとどまるものではなく、原稿作成・参加・発表・質疑応答に関する実践的な取り組み、ディシプリンや議論の文脈といった共有している知識の違いから生じる困難への対処、そこから得られた知見、さらには今後の研究にそれをいかに生かすことができるのかが検討されている。いっぽう発表原稿は、参加者の作成した原稿をほぼそのままに掲載しているので、国際発表の舞台裏での作業を少しでも追体験していただければと思う。

(責任編集：川端浩平)

越境する知

— オーストラリアの日本研究から考える —

川端 浩平

国境を越えて旅することの大きな意義が、異なった歴史や文化を抱えた人びとが生きる社会との刺激に満ちた出会いであることは自明だ。空港から醸し出される異国の匂い、歩く人びとの身体や飛び交う言葉も新鮮だ。ある種の解放感が満ち溢れてくるのを抑えることができない。まさにこの瞬間から旅ははじまる。

そしてこの瞬間に、もう一つの旅も始まっている。それは、これまで自分が積みあげてきた常識、記憶や経験がまったく異なるルールのなかで見つめなおされ、交渉を繰り返し、再編成されていく過程。これが越境の旅がもたらしてくれるもう一つのギフト。少し大袈裟にいうならば、自らの身体感覚に依拠するフィールド調査の試みであるといえる。

これらの越境がもたらす二つの知的冒険のメリットを否定する人は少ないだろう。しかしまた、これらの知的冒険で得られたものをいかに収穫するかということには様々な厄介がつきまとう。知識や言葉が翻訳される際に生じる大きなギャップや捨象されてしまうローカルな文脈。このグローバル化した世界では、わざわざ海外旅行などしなくても何でも手に入るし、家族や友人へのお土産を選ぶのも一苦労だ。仕方がないのでコアラのマカダミアナッツでも買うかとなる。そしてまた、知的なお土産を持ちかえるのも同じように難しい。知的にグルメな日本の研究者たちに何を持ちかえれば良いというのだ。オージーの面白い研究者の発表についても紹介してお茶を濁せばよいのだろうか。あるいはウルルン滞在記か。それではあまりに退屈ではないか。

だからといって越境する旅人が何も得ていないわけではない。映像や写真、土産話にはならないエキサイティングな経験が存在する。持ちかえることができないので、知りたければ越境してみてください！としかいえない何か、これが国際発信能力を涵養するための大きな鍵であるような気がする。越境して僕たちが住んでいるこの世界の広さを知るとともに、知っていると思っ込んでいたことの中に新しいことを見つけないということもある。国や言葉や文化が異なる世界へと旅することが重要なのではない。自分の外へ出てみることに、これが面白い。

僕たちが旅したオーストラリアは欧米からは遠く離れた辺境であるが、英語等のイギリスの文化資本と豊富な天然資源によって、南半球の経済と文化のハブとなっている。日本との関係はというと、注目されることは少ないが、第二次世界大戦中は敵国であった。しかし、1960年代より経済的なむすびつきが強まり、日本語や日本研究が盛んになり、人びとの日本への関心も高い。1917年にシドニー大学でJames Murdochが日本についての最初の講義を行ったとされるが、それは異国趣味的なオリエンタリズムを超えるものではなかった。しかし、1960年代に豪日経済委員会が設立されると、日本語および日本文学のプログラムが各大学に導入される。僕たちが訪れたオーストラリア国立大学は1962年というもっとも早い時期に異国趣味ではない日本語や日本についての教育・研究プログラムが導入された場所である。近年では、Gavan McCormackやTessa Morris-Suzukiといった研究者たちが日本研究を牽引してきた。

オーストラリアの日本研究は、海外で主流であるアメリカの日本研究とは少し異なっている。すでに述べたように、オーストラリアの日本研究は豪日経済関係の強まりと不可分であるが、冷戦期における国際戦略や日本の民主化と深くむすびつづけている戦後のアメリカの日本研究とは異なる。むしろ、アメリカにおける日本研究の枠組みや近代化モデルを批判的に問い直し、オルタナティブな日本研究を立ち上げてきたことにその特徴がある。1978年にThe Japanese Studies Associationが設立されるが、その第一回目の学会冊子にはAustralian-style Japanese Studies (オーストラリア流の日本研究)は、「日本への情愛に欠けたものでは決してないが、神秘主義・異国趣味・妄想的なものではなく、合理的かつ冷静な研究」をめざすことが宣言されている。このころの日本研究は、人文科学的(歴史・文学)から社会科学的なものや現代日本社会への批判的アプローチに取って代わられるようになる(Morris Low 1997)。

このオルタナティブな日本研究を牽引した一人が、越境する社会学者である杉本良夫であった。杉本はピッツバーグ大学で博士号を取得したのちに、1973年よりオーストラリアのラトロップ大学で教鞭をとっていた。ニューヨーク出身で、グリフィス大学で教鞭をとっていたロス・マオアとともに日本人論を批判していく。アメリカ、日本、オーストラリアのあいだを越境する両者は、比較社会論という枠組みによって、日本に関するステレオタイプにオリエンタリズムやナショナリズムへの欲望を読み取り、批判的に問い直していく(杉本・マオア1982)。そのとき杉本らが何よりも依拠しているように思われるのが、越境する自らの身体感覚である。

この日本人論批判の系譜はその後、カルチュラル・スタディーズなどの強い影響を受けて発展していく(吉野1997、岩淵2001)。カルチュラル・スタディーズは、戦後イギリスの労

働者階級文化の経験的研究として生まれたが、パリやフランクフルトの理論化の影響を受けて膨らんだ。しかし、1980年代のサッチャー政権時代に大学教員の待遇悪化のなかで起こった研究者の海外流出にともない、世界各地に伝播していったのだった。1990年代にはオーストラリアでもカルチュラル・スタディーズが流入し、戦後のグローバル化した同時代的な感覚から日本研究やその他の地域研究が問い直されたのだった。これら一連の越境発の日本研究が興味深いのは、人文科学的知から社会学的知へというアプローチの変化や枠組みの問い直しやカルチュラル・スタディーズの流入が、グローバルな政治・経済的な趨勢と連動した知識人の越境によって生じているという事実である。知識人が移動することにより、それまで自明であるとされてきた文化的ステレオタイプや偏見から抜け出し、より強度の高い知識の共有を可能としているのである。このことは、僕たち一人ひとりの越境——それがご近所であれ、海外であれ——そのものが、世界の知を担い、変化を引き起こしていることを示している。

グローバルな人や知の越境は、植民地主義の遺制、不平等や貧困といった圧倒的な非対称性をはらみながら、ますますローカルなことや個人的な経験や知識が出会う場となっている。今回のAsia Pacific Weekへの旅は、関西学院の参加者の個々の研究の背景にあるローカルな文脈やそれを支える個人の知的関心やモチベーション、立ち位置が改めて問い直される場であった。参加者たちは、大阪・兵庫で生活する日系ペルー人を取り巻く問題、三重県の鳥羽におけるイセエビ漁、阪神御影駅周辺の再開発と人びとの生活、西宮でオフ会に興じるオタクの文化といった相当ローカルな文脈をリアルに伝えようと苦心した。そしてそれはまた、変化しながらも硬直化しようとする日本をめぐる理解を問い直してもいる。ローカルでリアルな知からしか、全体の知やそれをめぐる権力構造を突

き崩すことはできない。このように考えてみると、国際発信能力の涵養とは、グローバルな知的枠組みや権力を内側から突き崩すために、外の世界へと一歩踏み出すという地道な積み重ねによって達成されるものであろう。以下に掲載する本特集の参加者たちのレポートからは、まさにそのような地道な軌跡を見て取ることができるだろう。そしてそのような彼・彼女らの旅の軌跡こそが一番の参考書となるに違いない。

参考文献

- 岩淵功一、2001『トランスナショナル・ジャパナー
アジアをつなぐポピュラー文化』、岩波書店。
- Low, Morris, "About the Japanese Studies Association
of Australia", in *Directory of Japanese Studies in
Australia and New Zealand*, The Japan
Foundation with the Australia—Japan Research
Centre, Tokyo, 1997, pp. 42-49.
- 杉本良夫、ロス・マオア、1982『日本人は「日本的」
か—特殊論を超え多元的分析へ』東洋経済新報
社。
- 吉野耕作、1997『文化ナショナリズムの社会学——
現代日本社会とアイデンティティの行方』、名古
屋大学出版会。

修士一年目からの海外発表挑戦記

松村 淳

2010年2月にオーストラリア国立大学（以下ANU）にて開催されたAsia Pacific Week 2010。社会人を經由しているというちっぽけな矜持は妙にチャレンジ精神に火をつけるようで、募集には二つ返事で参加させていただいた。しかしながら、私は2009年に大学院に入学したばかりの修士課程1年目、まだ国内の学会発表すら経験していない段階での海外発表である。しかも使用言語は英語だ。ハードルとしては極めて高い。

参加を表明したものの、実際に参加したところで「お荷物」もしくは「足手まとい」にはなりやしないか、寄せては返す波のように不安が常に頭を苛んだ。

しかし、それでもなんとか無事に済ませて帰国することができた。本稿は海外発表など自分には一生縁が無いだろうと思っている人に特に読んでもらいたい。私も海外での学会発表など自分には一生無縁と思っていた。しかし、そのような場がいつ降って湧いてくるかわからないのである。

さて、今回の発表、私には二つの大きなハードルが横たわっていた。一つ目は英語、もう一つは発表そのもの、つまりコンテンツである。

まず、前者に関して述べてみたい。新卒で大学院に入ってきた学生ならいざ知らず、私の場合学部卒業から10年以上経ってからの大学院入学である。大学院入試で少しは勉強したとはいえ、すっかり英語からは遠ざかっている。正式に派遣が決まってから発表当日までは十分な時間はなかった。ここであわてて勉強する。それを付け焼刃と呼ぶということは十分承知してい

るのだが、だからといってやらないわけにはいけない。アマゾンでペーパーバックを買い、『ハリウッドスターの英語』なるリスニング教材も手に入れた。これはipodに入れ、仕事の行き帰りに聴いていた。しかし付け焼刃はやはり“なまくら”であった。レオナルド・ディカプリオのインタビューを聞き流すだけで英語力が上達するはずも無いのは当然であるのだが。

つづいて、後者のコンテンツである。こちらも英語に勝るとも劣らない難物であった。大学院1年目が終わろうとする時期ではあったが、まだ発表できるような研究などできていない。二年目に向けてなんとか手がかりが掴めかけたという次期であった。これを多くの人に聞いてもらうだけのコンテンツとして練り上げることができるのか。もはや、一からフィールドワークをやる時間は無い。

苦肉の策として、8月に北京で行った発表をベースにして原稿を作り上げることにした。フィールドとなる現場は職場の近所ということもあり、頻繁に訪れ、資料収集や写真撮影をすることができた。たまたま知り合いが当地の再開発のコンサルティング業務をしていたので彼の事務所を訪ね、いろいろと貴重な話を伺う機会も得ることができた。

ざっくりばらんな会話の中に大阪の法善寺横丁の話題が出た。大阪の法善寺横町は火災によって、甚大なダメージを受けた。竣工を迎え、きれいになった法善寺横町を調査のために訪れた知人は、そこで長年店を続けてきた主人の何気ない一言が印象に残ったという。「はやく街を汚さなアカンな」店の主人が発した一言は再開

発の雰囲気を実に物語っている。私の研究フィールドである阪神御影地区もそうであるが、震災後に竣工した再開発の空間は一様にキレイである。類似したデザインの高層マンションやショッピングモールが立ち並んでいる。確かに死角も少なく安全・安心は担保されていることは間違いない。しかし、その施設群はその土地らしさを反映したものではない。なぜこの場所にこのデザインが必要なのか、そういう議論があまりなされないまま、とにかく安全・安心を担保したい行政と経済合理性を最優先したい開発業者の思惑に寄り添う形でシステムティックに街が整備されていくのである。「街を汚す」という言葉はそうした風潮に異を唱えるものとして、私にはとても斬新に響いた。私は、その言葉が気に入り、それをキーワードに発表を組み立てることにした。

特任助教の川端氏、リサーチ・アシスタントのテランス氏の多大なる協力のもと、無事に発表原稿が完成した。タイトルは“The redevelopment project after the Great Hanshin Awaji Earthquake”とした。the Great Hanshin Awaji Earthquake という文言を入れたのは、日本のみならず世界を震撼させた大災害の名称を取り入れることで、フィールドのローカル性にとまなう報告の「とっつきにくさ」を回避しようという狙いもあった。

そしてこれを基にパワーポイントを作成する。私はすでに北京における発表の経験から大事なことを学習していた。それは「困ったときの写真」である。写真があれば言葉が無くても言いたいことが伝わる。もちろん、誤解を生む場合もあるので写真の選択には慎重を期する必要がある。ゆえに写真の選択には最後まで悩んでいた。

ようやく完成したパワーポイントの発表資料であるが、当然それを英語で発表しなければならないわけで、私のような英語を不得手とする人間は、より入念なりハーサルをしておくこと

に越したことは無い。出発までに、大学院 GP 事務室で二度りハーサルをする機会を得たが、英語らしい発音を心がける余裕など全く無く、手元の英文原稿を読み上げることで精一杯であった。川端氏やテランス氏に発音をいくつか修正していただき、直せる発音は直し、その時点でできることは全てやった。電車での移動中も、英文の読み上げ原稿を携帯し、少しでも頭に入れるようにした。また夜寝る前に声に出して何度も読み上げる練習もした。原稿を暗記できるまで読み込んだり、発音を少しでもネイティブに近づけるように修正したりといったことも時間があれば可能だったのかもしれない。しかし、往々にして時間というものにはギリギリしか与えられていないものだ。後は現地に行けば何とかなるだろうという気持ちで出発当日を迎えたのである。

真冬の日本を脱出し、真夏のオーストラリアに行けるというだけで、寒さが苦手な私のテンションはうなぎ登りである。しかしながらオーストラリアの首都キャンベラまでの道のりは果てしなく遠かったのである。悪天候のため、最初の到着地ゴールドコーストに着陸することができなかったことを皮切りに、連鎖的に手違い・遅延が発生し昼過ぎの到着予定をはるかにオーバーしてオーストラリア国立大学に着いたときには、あたりはすっかり寝静まった夜中であった。

翌朝。動物園でしか聞けないようなトロピカルな野鳥の鳴き声で目を覚ます。朝から晴れてよい天気である。想像していたほどは暑くはない。極めてすごしやすい気候だ。われわれが投宿する学生寮からレクチャーが行われるホールまでは距離が結構ある。川が流れ緑溢れるキャンパスをゆっくり味わいながらの15分ほどの「通学」は実に気持ちのいいものだった。

発表前夜、特任助教の川端氏、白石氏が投宿するコテージに有志が集まった。現地で仲良くなった他大学のセミナー参加者や、ANUで

PhD を取得しに来ている面々も参加し、ともに食卓を囲んだ後、明日の本番のリハーサルをすることになった。結果的に言うところは大変に有意義な会であった。場に居合わせた人たちがさまざまな観点からの質問を私に投げかけてくれる。私は頭の中の論点を整理しながら必死に質問に答える。その答えに対してまた質問がくる。これを延々と繰り返していくうちに、持論の輪郭が少しずつ明確になっていった。

さて当日である。私の発表が組み込まれたのは Urban Environment というセッションである。私以外に三人の発表者がいる。彼らはそれぞれ東京大学で建築を研究する学生、早稲田大学で街とコミュニティについて研究する学生、早稲田大学で政治学を研究する研究員である。前二者はオーストラリアからの留学生であった。

会場は、広さ200m²ほどのレクチャールームである。チャコールグレーのカーペットが敷き詰められ、寒いくらいの冷房が入っている。天井付近に穿たれた窓からは真夏の青すぎる空が見えた。照明を落とした薄暗い室内と鮮やかなコントラストをなしている。

セッションが始まると急に緊張し始めた。落ち着かない。手から汗がにじみ出る。にじみ出た汗は冷房で冷やされさらに手から温もりを奪っていく。幸か不幸か、最終セッションということもあってオーディエンスの数はそう多くはない。おそらく講壇に立てば緊張も和らぐだろうと自分に言い聞かせてその時を待った。

そして、ついに本番を迎える。あいさつもそこそこに、さっそく発表をスタートする。声を出すと緊張が取れるはずであったが、読み始めてしばらくたっても一向に緊張が解けない。塾講師を10年以上も続けているので、人前で話をするのは慣れていてはいた。はずであった。しかし、まったく緊張が取れない。手元の読み原稿の分厚く感じる。まだこんなにも読みあげないとダメなのか、そう思うと一層緊張感が増し焦燥感

で頭がいっぱいになる。無我夢中で原稿を読み上げる。日本語ならアドリブで補足説明などを入れたりするうちに、自分のペースがつかめてくるのだが、英語だとそうはいかない。読み原稿を忠実に読み下す以外に、私は音声を発することができないのだ。

ふと目があった白人男性が「なるほど」といった顔をし、私の発言に頷いた。その時ぶつりと緊張の糸が切れた。なんとか伝わっているということが確認でき気持ちが楽になった。そこからは若干リラックスした状態になることができ、無事に発表を終えることができた。

さて、ここからは質疑応答タイムである。基本的に英語であるが、私の場合は英語力に問題があるので、川端氏や他のスタッフに議論の補足をしてもらった。UCLA の Mariko Tamanoi 教授から質問があった。内容は、「震災後の再開発において、その土地の住民たちは計画の意思決定に参加できているのか？」というものである。

答えとしては否であると述べた。理由は、通常の再開発とは異なり、災害からの復興再開発であるので、十分に合意形成をする時間もなく、とにかく行政が思い描く安全・安心を担保した街を一刻も早く出現させることに重きがおかれたからだとお答えした。時間の都合と私の英語力のなさで満足した質疑応答はできなかった。しかし、私が言いたかったことは伝わったのではないかと思う。

こうして、なんとか無事に発表を終えることができた。僥倖ながら一つだけ教訓めいたことを申し上げるなら、それは「事実を作ってしまうことの大切さ」ということだろうか。

今回の海外発表も、「発表するコンテンツが練られてから」あるいは「英語力がもっと充実してから」と尻込みしていたら実現しなかったはずである。少しでも自分の興味のアンテナが反応したらとりあえず手を挙げる。これが大事である。今回の発表を事例に挙げると私はまず

手を挙げ「APW 参加者」という事実を作った。そこから足りないものを埋め合わせていけばよいのである。それは私の場合決して少なくはなかったが、「求めよ、さらば与えられん」とマタイの福音書に書かれているのではないか。分からなければ周囲の人に聞き、助けを求めることが肝要だ。幸いにも私の周囲の人々は、それぞれ

れがお持ちの知識を存分に私に分け与えてくれた。彼らに何か恩返しをしなければと思うのだが、私の力ではそれも難しい。

拙文が今後参加を「なんとなく」検討している人の後押しになることができれば、きっと私に協力してくれたたたくさんの人々への恩返しになると思っている。

The redevelopment project after the Great Hanshin Awaji Earthquake

Jun Matsumura

1. Introduction

In this paper, I am going to focus on the redevelopment project in the Kobe area after the Great Hanshin Awaji Earthquake in 1995. In particular, I have focused on the projects near train stations. These attempts have great impacts on the landscape of the city as well as the lives of the residents.

2. Impacts and features of redevelopment projects

The following five characteristics on construction designs can be observed in common.

1. High rise apartment buildings
2. Relatively large-scale shopping malls
3. Creation of “open spaces” as evacuation spaces in case of disasters
4. Construction of linear arterial streets
5. Construction of wider sidewalks

We can see two trends behind the above redevelopment projects; disaster prevention and the redevelopment of the local economy.

First, the idea of disaster prevention is clearly reflected in the projects. Due to the trauma of the 1995 earthquake, the idea of disaster prevention is implemented with the highest priority in the projects. This tendency can also be observed in other cities in Japan. While many people are aware of the fact that such prevention design is implemented in the city planning, it has rarely become an issue. Over 6,000 people were lost in the Kobe earthquake and it is very plausible that lessons learned from the disaster are reflected in the redevelopment project. On the other hand, when we take a look at the finished projects in the Kobe area-reconstruction of the roads and sidewalks-we see less populated spaces that are often unattractive. The question becomes whether or not we should accept such landscapes for the sake of disaster prevention.

In the Hanshin Mikage area where I conducted interviews, there was opposition to the widening of roads by the local residents. However, such voices could not override the idea that “we have no choice when we consider the safety and security of the city against the risk of another earthquake.” On the other hand, we can not test whether such design is actually effective or not until the next

disaster occurs. While preparation is necessary to deal with future disasters, I personally feel uncomfortable with the city planning and building based on the idea of safety and security. However, I also doubt that the idea of disaster prevention is being used by the local government as a convenient slogan to encourage more redevelopment projects. In my view, the local government has had the idea of controlling the risk of disaster before the earthquake and the earthquake merely provided an opportunity to implement such ideas.

Second, the redevelopment of the local economy is another factor enhancing the project after 1995. In most redevelopment projects of train station areas, high rise apartments are built due to the residential demands in such convenient locations. In order to meet such demands and create more residential spaces, the government deregulated the plot ratio. As a result, the high rise apartments were constructed and dramatically changed the landscape of the local community. Shopping malls were also built to attract more customers to the redeveloped areas. Such redevelopment projects are also seen in other cities all over Japan.

As case studies, I have engaged in the fieldwork research on the redevelopment projects around railway station areas in Kobe and neighboring areas. I have divided the areas into three categories.

1. Residents did not come back to the neighborhood/area after the earthquake, and there are many vacant tenants in the business and shopping areas.
2. Residents returned to the neighborhood/area and it returned to its pre-earthquake condition.
3. Residents returned to the neighborhood/area and it became more attractive.

Most redevelopment projects seem to fit in category 2. However, there are some areas which have not recovered economically from the earthquake. For example, the shopping street in Nagata-ward that burned down during the earthquake was rebuilt as a shopping-mall. However, people have not come back to this area yet and the business is rather slow.

3. A case study of the redevelopment project around Hanshin Mikage Station

As a case study for this presentation, I would like to focus on the redevelopment project in the area around Hanshin Mikage Station. Mikage is located in Eastern Kobe towards Osaka along the Hanshin Railway and developed economically after the Meiji Era. The shopping street is situated underneath the elevated railway track. It was originally established as “Mikage Nakanishi Ichiba (market)” in 1920 and was transferred to its current location in 1935. It was renamed as “Mikage Shisuikan” in 1992. There are about 60 tenants and it had been recognized as the “kitchen of Mikage” in the local community. However, as other shopping streets in Japan, many shops have closed down in last ten years due to the aging of owners and tenants, and those who remain are worried about their future.

The main redevelopment project is a complex consisting of a 47 storied apartment and shopping mall in front of the station where Mikage Technical High-School used to be located. The shopping mall has already opened for business and the apartment will be constructed by March 2010.

3-1 Viewing the redevelopment project through the perspective of “Object and Background”

It is very clear that the redevelopment may create new environments as well as erase pre-existing environments. It is very difficult to expect how those changes influence the ongoing environment of the everyday lives of local people. Through the perspective of object and background, we can consider the pre-existing environment as the “background” and the newly developed area as “object”. While the object tends to emerge and become visible, the background tends to submerge and become invisible.

In the case of the Hanshin Mikage area, the local government and community put their efforts into not causing a sharp contrast on the border between the object and background. One attempt to do so was the creation of an “open space” (公開空地) to the facility. Normally, business and commercial areas are designed to maximize their floor space for business. However, in this case, they largely reduced the floor spaces for business purposes, and provided a space for local people instead. It is widely used by the people in the local community to sit and relax during their business and shopping, and also used for other purposes. For example, it functions as a venue for the traditional “danjiri matsuri (festival)” festival in this area. Furthermore, it also functions as a buffer zone and bridges two disconnected area, the pre-existing area and newly redeveloped area. It must be noted that this space was established by request from the local residence. The presence of a relatively strong local community enabled them to successfully blend the local essence into the redevelopment project.

3-2 Coexistence of old and new commercial facilities

It is often critically mentioned that the creation of new shopping malls in the redevelopment projects take away customers from the former shopping streets. However, the case of Hanshin Mikage is slightly different. New stores are opening one after another underneath the elevated railway track after the redevelopment project. Two new stores have already opened this year, and another four stores targeting young people are planning to open after August. While the old shopping streets and markets are facing difficulties all over Japan, Mikage Shisuikan regained its business from the synergetic effect with newly built large shopping facility Mikage Classe cross the street.

How should we see and evaluate this fact? Conventional studies on the redevelopment project have been critically focused on its negative effects. They generally depict the demise of local community and business areas such as the shopping streets. However, in the case of the Hanshin Mikage redevelopment project, shopping streets are being revitalized. The number of residents has increased and the 47-storied apartment has been a factor in revitalizing the community. Still, it is certain that issues will continue to arise as I continue my field work. It is likely that I will observe people in local community who share a sense of discomfort about urban design that emphasizes security at the cost of familiarity.

3-3 Messy-ing the street and the lived-in feeling

Since I have just started my fieldwork research of the Hanshin Mikage area I have yet to find clear anti-redevelopment sentiment from the locals. However, an opinion expressed by one shop owner in a

shopping street in Osaka where a redevelopment project was started due to a fire seems relevant. Living and working in the refurbished shopping street, he said that he wants to “messy up the street” (まちを汚す) and wants to recover the lived-in feeling of the local community. Of course, messy-ing the street does not mean making the area filthy or unclean. Rather, he wants to regain the color of the community as opposed to the bland community landscape which emerged after the fire. There is a term called “community landscape” (生活景) in architecture that I am also studying. It refers to the space that is decorated by the lives of the people in local community. Before the fire, production, sales, and consumption were organically linked to the local people’s everyday lives, and that created the community landscape. However, it was lost due to the redevelopment of the area, and many former residents left the place. It takes time to regain the community landscape. It is not easy to engender a sense of attachment to the community since the architecture and design of redevelopment projects usually do not provide a free space for local people to share. It is usually business oriented and there is not much space for noneconomic activities. It is often mentioned that the Japanese landscape is “motley-looking” and “dirty”. Loud and huge advertising displays and signs, telephone wires blocking the sky, a forest of telephone poles, advertising stickers on the walls, and so on decorate the landscape of many cities in Japan. Reaction to such a landscape is what has most likely led to the motley-looking and dirty elements to be excluded under the current redevelopment projects in the last decade. As a result, the newly created spaces are clean, but it is also difficult to feel an attachment to such landscapes, as the owner in the shopping street in Osaka expressed. In other words, the signs and stickers were the traces of people’s lives in the local community. Meanwhile, there are regulations on stickers and signs on the street in the redevelopment area. One wonders whether or not these areas will eventually absorb local color.

On a positive note, we can observe that local business owners and residents are engendering a lived-in feeling in neighboring areas near Hanshin Mikage where redevelopment occurred sometime ago. For example, during the holiday season the buildings are decorated with illumination by the local. As time goes by, the newly created landscape will feel familiar to local people. Meanwhile, we can also observe that some of the new projects and their architectures tightly control and regulate visitors. The market price of the real estate is considered as more important than how the local residents feel about the local community. In that sense, the place should be clean to maintain its market value rather than having a messy, lived-in feeling.

It is ironic that ideas and approaches gained in reaction to the experience of the earthquake caused unintended results such as the loss of people’s attachment to the local community. For my master’s thesis, through engaging in more intensive fieldwork research and interviews of the people in Hanshin Mikage area, I would like to see how people are struggling between adjusting and resisting to the new environment.

「国際発信」の場の〈限定性〉／からの〈可能性〉について

— Asia Pacific Week 2010 を振り返って —

稲津 秀樹

「国際発信能力」の涵養は、本 GP プログラムの柱のひとつに据えられている。それは、本プログラムのみならず、COE 等の関連プログラムにおいても大学院教育を推進していく上での、ひとつの「お題目」となっている感さえある。確かに、現代のグローバル化に対応した研究者の基礎体力として、英語をはじめとした語学を駆使しつつ、自身の研究成果を対外的に発表していくことが求められていることは間違いない。そのために、今回、海外の大学院が主催するセミナーに出席できたことは、今後の研究者としての歩みを考える上で、非常に幸甚な機会であったと思われる。

だが、参加する過程において、国際発信する「能力」そのものを涵養することを目的とする余り、英語を通じて発信される「内容」や発信の「形式」そのものに着目した議論が十分ではなかったのではないかと、という疑問と同時に、個人的な反省も浮かんできたことは確かだ。というのは、今回のセミナーへの参加を通じて、言語的／地理的／学問的なバックグラウンドが異なる人びとが集っている国際フォーラムの場であって、共に議論を行い、考えていくためには、狭義の「英語能力」(TOEFL や TOEIC といった能力試験で算出される能力値) 以外の素養とでもいべきものが研究者に求められているように実感として得られたからに他ならない。

よって、本レポートでは、Asia Pacific Week 2010 に参加した報告者の僅かな経験からではあるが、上の疑問に自分なりの回答を与えてみたい。具体的には、まず、① APW での報告内容

と当日の様子を振り返り、②英語／日本語という言語の違いと、国内／海外でのコンテキストのズレから生じる報告テーマの設定における〈限定性〉について触れる。最後に、③今回の APW で得た経験を踏まえつつ、個人研究と国際発信の場そのものの今後の〈可能性〉について考えてみたい。

①報告内容と当日の様子について

報告者は、開催3日目の午後から、「日本における移民集団 (Immigrant groups in Japan)」と題されたセッションにて、“The identity of Latino Immigrants in the context of Japanese Society” と題した報告を行った。

プレゼンターは報告者を含め4人で、日本における移住者の状況を難民／ラティーノ (日系人)／インドネシア人／在日コリアンを事例にあげる形で報告が行われた。報告者は最初から2番目に報告を行った。報告内容は、別紙の読み原稿にある通りだが、基本的には、1990年以降にデカセギを通じて来日したラティーノ／日系移民の人びとに対して、日本社会がどのようなまなざしをむけてきたのか、その中にあって、彼ら彼女らが如何なる自己形成を果たしているのかに関する、マクロ的かつ通時的な説明を行うことが目的であった。

報告後は、司会者によるコメントに加え、2、3人から英語で質疑・コメントを受けた。これらへの応答としては、基本的に英語による返答を試みた。ただ、自身の英語力の不出来さもあるが、質問者の意図を読み取れない部分もあり、意志の疎通が取れていないとは言いにくい

返答も含まれていたと思われる。ただ、全体的に、自身の過去の経験と比べてみると（報告者には別の国際会議での報告経験あり）、これといったトラブルはなく、比較的「スムーズ」に議論が行われた感触が得られた。

②英語／日本語という言語の違いと国内／海外でのコンテキストのズレ

狭義の「英語能力」にそれほど自信がない報告者が、当日、感覚的にも「スムーズ」に議論が行えたのはなぜなのか。それには、報告の事前準備にあたってのGP事務室のスタッフによるサポートがあったことが大きい。

特に、1) 英語／日本語という言語上の違いに起因する表現について、及び、2) 国内／海外における研究上のコンテキストのズレにかんしては、GP事務室のスタッフと話し合いを経つつ相当な調整が行われた。この事前調整がなければ、オーディエンスに伝わり、かつ、ディスカッションも順調に展開していけるような報告内容にはならなっただろう。

だが、その調整の過程で、報告者とオーディエンスの間に横たわる言語上／研究上の2つの「ズレ」をあらかじめ想定しつつ、報告内容をいわば〈限定的〉に練り上げなければならなかったことも確かだ。報告者の例でいえば、監視社会の文脈で問題化する社会的排除の現象を問題意識としてもちつつ、在日する移民集団を社会的にフィールドワークすることを研究テーマとしている。このコンテキストは、日本の社会学会で報告を行う際には、研究上のポジションの上で重要なものであり、また、ある程度の説明を行うことで通じる部分もあると思われる。だが、そのコンテキストが、「オーストラリア」で「日本研究」を行う人びとの間でどこまで共有されているのか、不明瞭な部分があった。

故に、こうした調査上の関心があることは、発表では強調せず、あえて、日本における

ニューカマー移民の状況を説明することに終始せざるを得なくなってしまった。それは、英語のsurveillanceという語自体が、日本の監視研究で指すところの、フーコー的なまなざし、ドゥルーズの管理社会概念、あるいはライアンの監視社会論、ひいてはそれらの議論の彫琢の上に成り立っている現状を必ずしも指すものではなく、政府／警察による狭義の「監視」として誤解されるところがある恐れから、こうした言葉の使用法そのものを変える必要が出てきたからである（本発表では、surveillanceに代わり、scrutinyという語が主に用いられているのはそのためである）。

よって発表主旨は、日本語の表現では「日本社会のまなざし」を受けつつ形成されるラティーノ移民のアイデンティティが焦点となったと説明できるのだが、英語の表現では「日本社会のコンテキスト」において形成されたラティーノ移民のそれという形になっている。更に、移民の状況を説明するといっても、最新のフィールドワークによって得られた話を紹介することで、自身の研究の最先端を示すというよりは、むしろ、現在の動向を理解してもらうために最低限の理解を求める話題にとどめざるを得ないところもあった。

であるから、報告者にとっての報告内容は、移民研究的にも、そして監視研究的にも、二重の〈限定〉の上で話さざるを得なかった部分がある。その意味で、今回の国際セミナーにおける議論内容というのは、個人的には、研究の先端性について語り合うことではなく、パネリスト／オーディエンス双方が、互いの研究について「レクチャー」しあい、「理解」を深めるといった側面が強かったように思える。

以上のように、国際セミナーでの発表の場であるからこそ求められる〈限定性〉については、肯定的にも否定的にも捉えることができよう。なぜなら前述のように、こうした議論上の〈限定〉があったからこそ、オーディエンスに

内容が伝わり、その後の議論が可能になったと言える側面もある。だが、一方で発表内容そのものは、研究対象に関する概要程度の議論であるため、そのまま日本国内に持ち帰ってくれば、先行研究と大差ない解釈をしているとも取られかねない部分があることは、否めない。

よって、今後の報告者にとって今回のセミナーが有益だったのは、単なる英語能力の向上以上に、報告を通じて出会えた人びとの繋がりがや、本報告の場だからこそ得られたレスポンスを踏まえた上での、今後の研究の展開について考えるヒントを得られた点にある。最後に、こうした国際発信の場からの〈可能性〉について考えてみたい。

③国際発信の場からの可能性について

国際発信の場から、個人的研究へのフィードバックが期待できる点としては、以下の2点が〈可能性〉として指摘できる。1点目は、発表内容そのものの今後の展開について。2点目は、今回得られた経験やネットワークを活かしつつ、国際発信の場そのものを解放していけるような方向性についてである。

まず、報告内容そのもののブラッシュアップを考えるにあたって、報告を終えた後のレスポンスで得られた内容を振り返りたい。例えば、本報告に対しては、以下のような質問・コメントが寄せられた。①移民＝犯罪者と見なす社会のまなざしは、日本の事例だけに留まらないと思われるが、各国の移民状況との関係で、報告内容をどのように理解すればよいか。②日本における日系人移民の現況は、日本型多文化主義の「失敗」として捉えていいのか。③移民と犯罪との関係について、日本においてブラジル系／ペルー系以外でしばしば指摘されているエスニック集団はあるか。④日本の多文化主義の問題点を詳しく教えてほしい、等々。

これは、主に①で、西欧諸国における移民研究との文脈上の関係性を問われたのに対し、②

③④で「多文化主義」を中心にした日本固有の状況を問われたものであると考えてよい。今回の報告では、ラティーノ（日系）移民に対する呼び名が、「日系」から「外国人」へと変化するに従い、彼らが社会的な逸脱者とされ排外的な地位におかれるようになる一方で、「日系」を指す磁場が、規範的に純化されたものとして浮かび上がるようになる変化を中心に報告した。この変化によって、当事者が、外国人としての逸脱のラベリングを回避しようとするために、主流社会側の規範意識（「日本」的とされる規範）へもあえて同調を見せるようになるという（それだけ言えば「バタ」な）プロセスを伝えることにとどまってしまったことは否めない。

だが、その際に、社会包摂策としての日本型「多文化主義（多文化共生）」的な発想がどう関係しているのか、という問題も併せて考えていくとどうなのか、という指摘は、報告者にとって重要な点を想起させてくれたと思う。確かに、日本における、ラティーノ（日系）移民の「外国人としての他者化」を考える際には、2001年以降に、ニューカマー移民の集住地の地方自治体を中心となり、「多文化共生社会」の実現を目指す「外国人集住都市会議」（強調筆者）を興したことは、大きな契機のひとつとしてあると思われる。

犯罪者予備軍としてのラティーノ（日系）移民への排外的なまなざしが、ある日突然、形成されるわけではなく、包摂と排除の力学がせめぎ合う中で、そうした出来事を水路づける方向性というものが構築されてきたはずである。その点を、改稿の際により丁寧に論じていければ、日本のラティーノ（日系）移民を事例として、社会的排除と包摂をめぐる歴史的な重層性かつ複数の主体性に着目した議論が展開していいのではないか。そして、それを引いては、西欧での移民研究の文脈と併せて考えていくことは、グローバル規模で偏在する移民現象を社会

学的にどのように捉えるかという、より大きな課題とも接続していけることだろう。今後の課題としたい。

最後に、今回のセミナーで得られた経験と若手研究者同士のつながりから、国際発信の場そのものを、狭義の国際学会やセミナーに限定していかない方向性を思い描く「ヒント」を得ることができた。上記の点と同じく、今後の課題として論じておきたい。

通常、「国際発信能力」が主張されるのは、国際学会や国際セミナーといった研究者同士のコミュニティへの参加を想定してのことと思われる。今回の APW で個人的に経験できたことは、最先端の研究発表を常に意識せずとも、報告者の研究内容の概略や問題意識を紹介するだけでも、その内容を確実に前進させる契機をふくんだレスポンスが得られることであった。

その意味で、「国際発信」を考える際には、研究者コミュニティに閉ざしたものばかりを考えずとも、研究者にとって「プラス」となる場を創造していくことができるのではないだろうか、と思うようになった（もちろん、これは既

存の「国際発信」の場を否定するものではない）。特に、報告者にとっての「フィールド」を想定するならば、それ自体が、グローバルに開かれているものとして存在していることもあり、なおさらである。

とするならば、在日外国人（エスニシティ）研究を志す者にとって、在日する当事者たちに研究者のフィールド調査の成果を紹介するのみならず、その「成果」について語り合えるような場を「日本国内」において考えることも、ひとつの「国際発信」の場の可能性を示していると言えないだろうか。幸い、今回の APW 報告を通じて、在日コリアン、在日インドネシア人、難民研究関係者などとのネットワークを築き上げることができた。彼らとの連携を含めて、今後、「国際発信」の場そのものを、学者に限定されたものから解放していく可能性も含めた議論も行うことは、本 GP プログラムの課題として掲げられた、「社会の幸福」について、アカデミックな視点のみならず、実践的にも考えていく上で、重要なことではないかと思われる。

The Identity of Latino Immigrants in the Context of Japanese Society

Hideki Inazu

Introduction

Slide 1

Today, I am going to talk about the situation of Japanese descendants who come to Japan as immigrants and their identity in Japan. They are called *Nikkeijin* in Japanese. When they started to come back to Japan since the 1980s, the way of watching them was based on the obvious ethnic connection between Japanese descendants and host Japanese. Ethnicity was the most legitimate reason for the Japanese government to accept them.

However, the view of *Nikkei* from Japanese society has gradually changed over time. The view of ethnicity has changed and now immigrants and Japanese are divided into different ethnic groups—Japanese and Latinos (such as Brazilians and Peruvians). They are differentiated as “others” and looked upon as criminals. Moreover, this demonization means that Japanese-ness is defined not only by blood or ethnicity but also whether or not they have committed crimes. This differentiation process from Japanese descendants to different ethnic groups and potential criminals occurs to us an important question in thinking of the relationships between Japanese and immigrants.

Slide 2

In this presentation, I will highlight the change in how Japanese society has viewed *Nikkei* immigrants first as Japanese descendants, then later as Latino foreigners. First, I will give some background information about the inflow of Japanese descendants from Latin America to Japan. And then, I am going to explain what happened to their identities divided into 3 stages through the resident process in Japan.

Brief background of the inflow of Japanese descendants from Latin America to Japan

Slide 3

First, I will briefly tell the history of the inflow of Japanese descendants and their societal position in Japan.

Slide 4

Please look at this graph. This shows the total number of foreign residents in Japan. The number has

increased from the effects of globalization, especially since 1990s. As you can see the number of foreign residents is over 2 million now. In 2007, about 2% of people in Japan are from foreign countries.

Slide 5

And this graph shows the number of registered foreign residents by the country of origin after 1950. According to this graph, we can see that the number of Koreans has declined gradually and the number of people from other countries like China, Brazil, Philippine and Peru has increased since 1990s. The immigrants from Brazil and Peru consist largely of Japanese descendants and their families.

Slide 6

Japanese descendants and their families are called “*Nikkeijin*”. According to Yamashiro, *Nikkeijin* are “Japanese emigrants and their descendants, or persons of Japanese ancestry, although this usually does not include Japanese nationals in Japan”.

Slide 7

Since the end of the 1980s, the Japanese government has become active in accepting Japanese descendants mainly from South American countries such as Peru and Brazil. At the time, South American countries were suffering from economic depression and political unrest, while Japan was in the middle of a bubble economy and faced a shortage of unskilled labor in the secondary industries. Moreover, the Japanese government was concerned about illegal workers from other Asian countries. Therefore, since 1990 they changed the visa system to accept *Nikkei* immigrants from South America in an effort to reduce the number of illegal workers from other countries. A system of accepting *dekasegi* or migrant labor from South America was formed.

Scrutiny from Japanese Society and Immigrant Identities

Slide 8

From now, I will focus on how Japanese society views and shapes the identities of Japanese descendants and their family members.

Slide 9

According to some earlier studies, even before returning to Japan, Latino’s of Japanese descent have constructed their ethnic identity as “Japanese” in Latin America in order to strengthen their ethnic bonds. In immigration policy the Japanese government emphasized being “Japanese” with action such as revising Immigration Control and Refugee Recognition Act in 1990.

Slide 10

Under the new law, “*Nikkeijin*” (up to three generations) and their families were able to be

accepted as residents and this allowed them to move and work without restrictions. Status as *Nikkeijin* was proven through *koseki* Japanese family registries created in the Meiji era. *Nikkei* immigrants qualified as residents if they were children of children born as Japanese or grand children of people born as Japanese who have registered *koseki* in Japan as Japanese nationals.

Slide 11

This definition of *Nikkei* is based on ethnicity and divided people into “True (verdadero)” *Nikkei* who have verified their status using *koseki* or “False” *Nikkei* (*chicha*) who have bought their verification from others. Some episodes about this distinction are written in my paper.

Slide 12

However, whether or not they are true or false *Nikkeijin*, Japanese society has gradually viewed all immigrants from South America as ethnically different from Japanese. This is despite the fact Japanese society requires them to prove their Japanese-ness through *koseki* verification. The concept of the immigrants’ true “home” has also changed from Japan to the countries where they were born (Brazil or Peru). *Nikkei* themselves often ask “when will I be going home?” On the other hand, they also see themselves as long term residents of Japan, not only sending money to their home countries but also buying real estate in Japan.

Slide 13

For those who choose to stay in Japan, how they are viewed by Japanese society increasingly becomes bigger issue. The ongoing differentiation between Japanese and *Nikkei* continues as the immigrants are treated as “*gaikokujin*” (outsiders) and demonized. This demonization often occurs in the form of viewing immigrants as criminals. Let’s look at the case of the 2005 murder of a girl in Hiroshima by a Peruvian national.



(source) Asahi Newspaper 30th, 11, 2005

(source) Mainichi Newspaper 30th, 11, 2005

Slide 14 Left: “*Nikkei* Peruvian was arrested” Right: “A Peruvian was arrested”

Slide 14

At first, when the criminal was arrested, some of the Japanese media did not distinguish between Japanese Peruvian and Peruvian. On the left the Asahi Newspaper reported the crime as being perpetrated by a *Nikkei* Peruvian. On the other hand, the Mainichi Newspaper reported it as a crime by a Peruvian national.



(source) Yomiuri News Paper 30th 11, 2005

Slide 15 Left: “A strange man watching children: a Peruvian was arrested”
Right: “The number of crimes by resident foreigners is increasing”

Slide 15

As reporting continued, the crime was reported as being committed by a foreigner of Peruvian nationality with a criminal record by foreigners in Japan, who had been seen watching children.

Slide 16

Moreover, the media reported what he said to the police “I was possessed by the devil”. The media seemed to be taking advantage of the sensational nature of the suspects’ comments.

Slide 17

When *Nikkei* immigrants commit crimes, it seems that the foreign aspect of the identity is emphasized. This graph shows the relationship between the number of crimes reported in the Asahi Newspaper and the usage of *Nikkei*. As you can see, the word *Nikkei* is used less than their nationality. In other words, crime committed by *Nikkei* immigrants is reported as being committed by foreign nations rather than by people of Japanese descent.

Slide 18

“International Press” is one of the biggest media outlets for Latino immigrants in Japan. After the suspect, Torres Yagi was arrested; the editors expressed their concerns on the front page of the paper. The headline was “Peruvians fear the harmful influence of Torres Yagi”. And they said, “Peruvians living in Hiroshima and Latin Americans in general are spending anxious days and suffer from prejudiced and hostile interactions with Japanese. After experiencing unfavorable media coverage and scrutiny from the police many Latino/Peruvians are attempting to define their own identity and are writing about being scrutinized by Japanese society.

La comunidad condena el crimen y exige contra el culpable todo el peso de la ley

Estupor, temor y convocatoria

El crimen que ocurrió en el barrio de Yano Nishi, en Akiku, suburbio de Hiroshima, causó un sentimiento unánime en la comunidad latina local. Todos sienten vergüenza porque un extranjero fue el autor de tan brutal crimen y rabia porque se ha denigrado la imagen del latino.

Natasha Goto/Colaboradora HIROSHIMA

noshita fue un choque para todos en Hiroshima. Sin embargo, cuando se supo que el peruano José Manuel Torres Yagi era acusado de ser el autor del asesinato la consternación fue mayor incluso para los japoneses, pues este tipo de crimen no es característico de los extranjeros, todos tenemos la seguridad de que era un japonés loco. Yo he oído hablar de casos de robos o peleas que terminan en muerte que envuelven a extranjeros, pero jamás los relacionaría con este tipo de crimen japonés y la primera vez que observo que el rostro de un sospechoso sea expuesto tan libremente, resaltando que es extranjero sobre lo que expresé este señor de que lo poseyó el diablo. En mi país sabemos afrontar lo que hacemos, a nosotros nos pasa

OPINA LA COMUNIDAD

Marina Nitzuma, Hamamatsu
Los padres peruanos que están seguros en el colegio, que sólo nada les va a pasar, pero ocurre este caso y nos hace pensarlos dos veces. A mi hijo le dijeron el otro día sus compañeros japoneses que ella era peruana igual que el criminal, que entonces podía ser también una criminal. Ella no se merece actitudes como esa, por eso yo le epliqué que ella no tenía por qué sentir mal”.

Antonio Arakaki, Tochihi
Mientras que estamos de dar una mano a mover una mejor imagen. Siempre estamos preocupados por el tema que piden sufrir los hijos, y este tipo de situaciones no hace más que aumentar. Cuando pienso, si fuera mi hijo, me pregunto nervioso”.

José Sisido, Hamamatsu
“Mi hijo me comentó que su profesor del colegio preguntó a todos en el salón si ya sabían quién era



(source) International Press 10th, 12, 2005, A4

Slide 19 Anxiety felt from Japanese mass media coverage

Slide 19

In this picture you can see the house where the suspect lived (Here, I show the picture of Yomiuri Newspaper, 30th 11, 2005). This is reported by Japanese media. However, the same house in another picture (below), you can also see a gathering of the Japanese media broadcasters. This report shot by International Press shows the intense scrutiny by the Japanese media.

Slide 20

In addition to the media discourse, a month after the suspect was arrested, the Japanese Ministry of Justice decided to revise the visa requirements for resident status. The new conditions for resident status were changed to children of children born as Japanese, who are of high moral standing or grand children of people born as Japanese who are of high moral standing and are registered as Japanese nationals. Since then, Japanese descendants have been limited to people who have no criminal history. The definition of being Japanese was changed to include not only ethnicity but also moral character.

Slide 21

The younger generation of *Nikkei* immigrants often struggle with the issue of demonization as foreigners and purification as Japanese. At last, we will focus on a hip hop group and a song by them. The group Tensais MCs consists of young *Nikkei* Brazilian and Japanese. The title of the song is “faca a coisa certa”, do the right thing in English. Here are the lyrics in English.

Slide 22

音楽

Conclusion

Slide 23

In this presentation I will focus on the changes in the identity of Japanese descendants or Latino immigrants in the context of Japanese society. As a result, I indicated three stages of the construction of their identities. First is their identity as Japanese descendants. Second is their identity as a different ethnic group. Third is their identity as both demonized aliens and pure Japanese descendants.

Under a flow of immigrants from outside of Japan, the idea of multiculturalism and integrating immigrants to Japanese society has been introduced and spread in the first decade of this century. However, we often observe that particular ethnic groups are represented in the media as a factor in the increase of crimes, and thus often become the target of scrutiny by the government. The immigrants have been constructed their own identities throughout this process.

In order to delineate the effects and problems caused by excessive surveillance targeting particular ethnic groups, this study takes an example of *Nikkei* immigrants. There is a need to criticize how Japanese society identifies immigrants based on Japanese-ness and to understand the issue from what immigrants say about their everyday lives and their practices.

References

- National Institute of Population and Social Security Research, 2009, *Jinkou Toukei Shiryoushu 2009 [Databooks of Statistics of Population]*, <http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/Popular2009.asp?chap=0> (2009/03/03)
- Ishi, Angelo, 2007, Zainichi ni natta Braziljin no Transnational na mosaku [Transnational groping by Residence Brazilians], *Gendai Shiso [Revue de la Pqansee d'aujourd'ui]*, 35(7): 106–115.
- Paerregaard, Karsten, 2008, *Peruvians Dispersed: A Global Ethnography of Migration*, Lanham: Lexington Books.
- Takahashi, Hidemine, 1995, *Nise Nipponjin Tanhouki [Discovery of False Japanese]*, Tokyo: Soushisha.
- Takamichi, Kajita, Tanno Kiyoto, Higuchi Naoto, 2005, *Kao no Mienai Teijyuka: Nikkei Brajirujin to Kokka, Shijyou, Iminnettowaku, [Invisible Residents: Japanese Brazilians vis à vis the State, the Market, and Immigrant Network]*, Nagoya University Press: Nagoya.
- Takezawa, Yasuko, 2002, “Nikkeijin and Multicultural Coexistence in Japan: Kobe after the great earthquake”, Hirabayashi, L. Ryo, Akemi, Kikumura-Yano, and James A. Hirabayashi, *New Worlds, New Lives: Globalization and People of Japanese Descent in the Americas and from Latin America in Japan*. Stanford, CA: Stanford University Press. 310–330.
- Tsuda, Takeyuki, 2003, *Strangers in the Ethnic Homeland: Japanese Brazilian Return Migration in Transnational*

Perspective. New York: Columbia University Press.

Yamashiro, H, Jane, 2008, "Nikkeijin", Schaefer, T, Richard ed., *Encyclopedia of Race, Ethnicity, and Society*. 983-5.

Young, Jock, 2007, *The Vertigo of Late Modernity*. London: Sage Publications.

Yamamoto, Kaoruko, 2007, Diaspora no Kodomo tachi [Children of Diaspora], *Gendai Shiso [Revue de la Pqansee d'aujourd'ui]*, 35(7): 240-248.

Yamanaka, Keiko, 2000, "I will go home, but when?" Labor migration and circular diaspora formation by Japanese Brazilians in Japan", Douglass, Mike and Glenda S. Roberts ed., *Japan and Global Migration: Foreign Workers and the Advent of a Multicultural Society*. Honolulu: University of Hawaii Press, pp. 123-152.

「国際発信能力」を養うアリーナづくり

中川 千草

大学院 GP プログラムにスタッフ（プログラムコーディネーター）として参加しはじめてから、1年半が経過した。この間、報告者は、大学院研究員、そしてスタッフという、二つの立場から本プログラムにかかわってきた。本プログラムを通じて、研究科内の院生や研究員のホッペを耳にすることが何度もあった。

「国際発信能力の習得」は、本プログラムのソシオリテラシー教育の一角にすえられている。しかし、院生や研究員には、「海外に行ったことがない」「外国語でのコミュニケーションにあまりに興味がない」という声、そして、英語そのものや国際学会（シンポジウム）に見せるためらいがみられる。報告者は、外国語学部、そして文化人類学を専門とする院生が大半を占める研究室など、外国語や海外に足を運ぶことにたいして、良くも悪くもほとんど迷いがなく、体当たりが当たり前、という環境に身をおく期間が長かった。親が「外国語大学（しかもアフリカの言語専攻）に行かせたのは間違いだった」と嘆くほど、声がかかれば、どこにでもホイホイと出かけていった。英語が得意だとかそういうことではなく、単に知らない世界に行ってみたいという好奇心だけが、海外へと駆り立てる理由だった。そういう若者はおそらく少なくないだろう。研究という場に身をおくようになってからも、「海外に行ける」というだけで、国際シンポや調査にわれ先にと手をあげてきた。

それだけに、本研究科の院生や研究員たちの大半が見せる、遠慮がちな態度は不思議に映った。確かに、国際学会での報告には時間がか

かってしまう。他に優先したいことがあるのかもしれない。しかし、知的冒険心はそれぞれあるはずだし、自分のものと比べれば、彼・彼女らの研究内容は国際的に発信していくに十分に値する。にもかかわらず…である。

では、教育支援を目的とした本プログラムにおいて、国際発信能力の涵養とは、どこからはじめ、何をゴールとすべきなのか。単に、国際学会での報告や英語学術雑誌への投稿論文の数を増やせばよいという形式的な「結果」ではないだろう。客観的、数値的業績が必要とはいえ、根本的なプログラムづくりの必要性をこの間、感じてきた。

今回、オーストラリア国立大学での Asia Pacific Week 2010（以下、APW とする）の開催が告知され、本研究科からは報告者を含む4名の参加が決定した。オーストラリアに渡るまでの数ヶ月のあいだ、この4名、そして GP プログラムのスタッフは、共同で作業をすすめてきた。本レポートでは、この「共同作業」という点に注目しつつ、国際発信能力が培われるプロセス、そして求められるアリーナについて考えてみたい。

1) 共同作業が開く門

結論から先に言えば、APW 参加のなかでもっとも有意義だった時間は、その「準備」段階にあったように思う。研究をすすめていくうえで、当日の報告や質疑応答が役立つことに間違いはないが、ここでは「準備」そのものもつ意味を強調したい。特に「共同作業」を通じての準備は、今回参加した院生・研究員、また

かかわったスタッフにも大小さまざまな効果をもたらした。

〈英文化で「はだか」のつきあい〉

まず、「英文化」という作業について振り返っておきたい。この作業のなかで、参加者は、英語チューター、そして他の参加者との議論を重ねた。国際学会での報告に向けての通常の手順としては、はじめに日本語でタイトルや内容をまとめ、それらを英文化するということになる。そして、ペーパーを書き、それをもとに当日の発表原稿を準備する。さらに、資料をパワーポイントで作成する。こういった作業は日本語でも時間がかかってしまう。わたしたちの多くは、英訳する際、結局、辞書を引き、出てきたフレーズを、それが文学的表現や時代錯誤なものだということに気づかず、そのまま使ってしまうがちである。風変わりな表現を「かっこいい」とさえ思ってしまう。辞書的表現に忠実になりがちなうえ、日本語の文章表現にこだわりすぎてしまい、英訳したものが想像以上に「とんちんかん」なものになってしまうこともめずらしくない。

そこで、英語チューターとの「共同作業」に入る。ここでは、英文の文法表現を修正するだけではなく、学問的な関心、研究史上の位置づけなどを綿密に議論、確認することに多くの時間が割かれる。シンプルかつ明確にまとめるということは、簡単なことではない。つい、難解な表現でごまかしたり、ぼかしたりしてしまう。チューターと議論し修正をすすめる際、不要なレトリックが取り払われ、論旨がシンプルになればなるほど、自分の研究が丸裸にされるように感じ、不安を覚える。修正後の文章を簡素すぎると感じ、こね回した表現を付け加えてしまい、また、指摘されるということを繰り返す。実際、「この表現はどの辞書に載っていたの？」と聞かれ、あわてるといったことがあった。

このプロセスのなかで、自分自身の研究内容がいかに「詩的」「感情的」になってしまっているのかということを感じることができる。フィールドワークにもとづき、実際に現場の文脈を尊重するがゆえに、つい置き去りにしてしまっていた客観性への引き戻しという点においても、英文化作業、およびそこで交わされる議論は役立つ。一度、丸裸になってみる、ということが英文化作業の意義といえよう。

〈小さなアカデミック共同体の基盤〉

また、参加者それぞれの発表上の工夫に互いが刺激されるということもあった。たとえば、映像資料の使用である。それぞれの研究的関心・目的は、発表される場がグローバルな空間であることに相反し、非常にローカルなものとなる。報告者は、“The system of Conserving Resources in Japanese Lobster Fishing” というタイトルで、環境保全システムにおける主体形成について報告を行ったが、その対象は非常に限定的—三重県の熊野灘沿岸部のある集落におけるイエセビ漁をめぐるローカルな規範—だった。これほど限定的な内容を、その地域、ましてや日本の漁業についてほとんど知らないような人びとにたいして、学問的なメッセージとともに届けるということは、簡単なことではない。「ディスカバリー・ジャパン」のように「伝統的」で「奇異な」トピックの印象だけが残り、学際的な議論が広がらない可能性もある。まずは、より現実的なものとして、報告を聞いてもらうという土壌を作らなければならない。

日本での学会発表では通常、同じような研究テーマのもとでセッションが組まれたり、もともと〇〇社会学会といったように、学会自体の枠組みがある程度ははっきりしている。その分、「共有されていて当然の文脈」に甘えてしまう。しかし、今回のような学問も日常生活も異にする人びとにたいしては、そうはいかない。わざわざ時間をかけて足を運び、英語で発信する

からには、やはり「手ごたえ」が欲しくなる。

そこで、非常に役立ったことが、映像資料であった。基本的なことではあるが、映像を使用した報告と文字だけのそれとでは、聞き手へのメッセージ性という点において圧倒的な差を生む。当初は、映像資料（音声を含む）を使用する予定だった参加者は1名だったが、それに刺激を受け、最終的には計3名が映像資料を報告のなかに盛り込むことになった。報告者も冒頭に、日本のイセエビ網漁、オーストラリアのイセエビ籠漁を映像で紹介した。さらに、写真や図を多数用い、グローバルな聞き手のイメージを日本のローカルな現場へと引き込むよう努めた。実際、報告者も含め、当日映像を使用した報告への反響は大きく、限定的な事例をよりリアルに伝えたり、あるいは、聞き手の身近な類似例を引き出したりすることが可能となった。

また、こういった報告方法を選択することにより、映像ファイルや画像の処理の仕方、使用方法といった技術的な能力を習得する機会につながった。

国際学会での発表は、通常の国内の日本語による報告以上に、準備期間を要する。しかし、単に手間がかかるというわけではなく、このような技術の習得と実践、そして共同作業によるさらなるブラッシュアップが実行されるがゆえと考えれば、国際的な場での報告は、自分自身の研究の可能性を開いていく第一歩として位置づけることができるだろう。つまり、これらの経験すべてが、日々の研究活動と日本での学会報告にフィードバックされるということである。

2) 今後の展望

今回 APW に参加することにより、今後の展望を大きく二つみつけることができた。

一つは、海外在住の研究者とのネットワーク形成である。同セッション内では、他に3名が報告を行ったが、それぞれの研究テーマに強い

関連性があるわけではなかった。そのため、セッションとしての盛り上がりはあまりなかったといわざるを得ない。しかし、それに落胆したり、「あっちのセッションだったらよかったのに」と妬んだりしても意味がない。国際学会での報告は上述したようにまず、準備の段階で大きな成果が得られる。そして、報告後にも同様の研究上の前進が期待できる。それが、ネットワーク形成である。

司会者とは多くの共通テーマがあり、それらに関して細かなアドバイスをもらうことができた。特に、報告内容に関連する海外の研究内容や研究者（APW 主催のオーストラリア国立大学内の研究者や研究機関）を紹介してもらえたことは、自分自身の研究をより国際的な場へとリンクさせていく、足がかりとなった。

さらに、ANU 在籍の若手研究者の方々とはセッション内外で議論を交わしたことにより、今回報告したような内容が、他のどのような学会やシンポジウム、さらに学術雑誌に適しているのかということをそれぞれの具体的な経験にもとづき示してもらうことができた。

以上のように研究科内の共同作業、および海外在住研究者とのネットワークという二つのつながりができることにより、報告者の研究の幅は内容、環境ともに確実に広がった。さらには、次の具体的な目標設定も可能となった。

こういった場の基盤が本プログラムを通じて設けられたことは、今後の「国際発信能力の習得プログラム」を企画するうえで、非常に参考になるだろう。研究はひとりでするものではないということを再確認するとともに、国際発信能力を育てるアーリーナづくりとは、たとえば、翻訳におけるサポート体制、報告上の工夫を情報交換できる環境、そして、今後の研究上の指針が導かれるような報告の場とネットワークという総合的な場である必要性を実感した。この経験と情報を今後のプログラムおよび自分自身の研究にフィードバックしていきたい。

The System of Conserving Resources in Japanese Lobster Fishing

Chigusa Nakagawa

1 . Background

Using the idea of the “drama of the commons” this research analyzes the local system and common rules of Japanese lobster fishing based on the theories and findings of environmental sociology and folklore. The phrase drama of the commons comes from Elinor Ostrom, a leading researcher of the commons theory. In 1968, Garrett Hardin, a biologist, wrote a paper entitled “The Tragedy of the Commons”. In his paper, Hardin insisted on the necessity of a macro environmental perspective that questions excessive individual rights and freedom. He alerted that if we continue to act with the assumption of the rational individual under a commons system, the environment would be destroyed. On the other hand, Ostrom insisted on the possibility of the “drama” of the commons. Drama means that the commons sometimes causes “tragic” destruction but can sometimes create an opposite “comedic” sustainability. I will make this presentation based on Ostrom’s theoretical framework.

In my research, I am focusing on the everyday lives of people living in Japanese regional society. Japanese society has undergone significant changes in the last decade or two. The side-effects of these changes particularly become more obvious among the relatively vulnerable people and areas that are marginalized by the greater society. I have engaged in fieldwork research since 2002 in a small coastal village in Mie prefecture. Mie is located in the Kansai area, and is two hours by train and one hour by car from Osaka. Through a case study of this small coastal village in Mie, I would like to focus on the mechanisms of local knowledge for the conservation of natural resources, maintenance of human relationships, management of self-governance, and so forth.

2 . Purpose of research

Unlike other laws in Japan, the Japanese fishing law has developed heavily based on the local rules and traditions since the Meiji restoration. The purpose of this research is to reconsider current perspectives on the environmental conservation system in Japanese rural societies through people’s everyday activities. In particular, I have focused on a coastal fishing law for lobster fishing and how the common rules it is based on affect the greater issues of resource sustainability, an aging society, and population decline.

3. Research subject-Japanese coastal fishing law and Kumano-nada coastal area

At first, I would like to introduce an outline of Japanese coastal fishing law. The most fundamental law, the Fisheries Cooperative Code was established in 1886. This law aims to maintain autonomous orderly fishing and to sustain the resources. It may seem that this law simply integrates local fisheries into the nation state; however, from another aspect, this law also functioned as a device to continue to apply old common rules and traditions by setting up fisheries cooperatives (FC) in each region to manage their fishing and make full use of traditional common rules.

In the last ten years, many local FCs were merged for financial reasons and the number of FCs is decreasing. In the Kumano-nada area, 16 FCs were incorporated into a mega FC in 2000. Now, the number of members is over 3000. The media reported that this incorporation created the biggest FC, Kumano-nada FC, in Japan at that time. Moreover, 17 FCs including Kumano-nada FC agreed to merge in 2009. The reason is most FCs has faced financial difficulties. After the merger, they have tried to overcome the financial crisis by cutting the number of employees and closing small markets. Small markets and refrigerators in each fishing port had been regarded as symbols of the fishing villages by the local community. However, these symbols are gradually disappearing from the port today due to the merger.

Although small markets and refrigerators have disappeared after the merger, FC branch offices still remain in each community. In the end, self-management of the fisheries in each community has continued and each FC branch and the fishermen are able to engage in fishing based on their own long-lasting local rules.

4. A Case study of lobster fishing in Okaura village

Lobster fishing is conducted through gill nets in rocky areas. 20 fishermen have lobster fishing rights in Okaura village. In Okaura village, the majority of fishermen are engaged in lobster fishing. Now, I would like to focus on the very precise local rules concerning time and space for lobster fishing.

4-1. Local rules concerning time

In Mie prefecture the open season of lobster fishing is from the 1st of October to the end of March. However, this regulation differs from one community to another, and it is decided by local rules of the neighboring fishing communities. For example, the open season for Okaura village is limited and starts in December since the fishing bank is shared with other neighboring communities and their fishermen.

Furthermore, there is a local regulation on when fishermen can lay their nets to capture lobsters. When a leader of the local lobster fishing guild waves a red flag on 2 pm, the fishermen leave the harbor, and sail to the fishing area. They lay nets and draw them up the next morning. The reason why such a local regulation still exists is related to the rules concerning space.



Figure 1 the fishermen

4-2. Local rules concerning space

There are two types of fishing grounds in OKAURA village. One is “HONBA” (figure 2), and the other is “HIROIBA”.

HONBA

There are eight HONBA in Okaura village. On each day, the fishermen can only pick one Honba site at which to lay their nets. Usually, there is more than one fishing boat engaging in fishing in each Honba. The location and time are decided by drawing lots. First, groups called “NAKAMA” who share the same Honba are decided by drawing lots. Secondly, each group draws lots to pick a first Honba to start with. However, after you pick your first location, it rotates automatically. For example, if a group lays nets on site 1, they will automatically move their fishing location to site 2 on the next day. During 1980's, there were 5 or 6 boats in each group, but there are only two boats at most today. There is also a rule for a place to lay a net within the same group. For example, if boat A lays net on the right-side, B lays in the center, and C lays on the left-side on the first day. On the second day, A is in the center, B is on the left-side and C is on the right-side. These local regulations engender a sense of equality among the fishermen.

HIROIBA

Any members of the lobster fishing guild can lay their nets freely in the Hiroiba, and it is basically a first-come-first-served system. However, the fishing in the Hiroiba is not very stable and there is more risk. Fishing in the area depends on the skills of the fisherman. The HIROIBA is challenging, but a skilled fisherman may be able to make a fine haul and this sometimes drives fishermen to gamble on the HIROIBA.

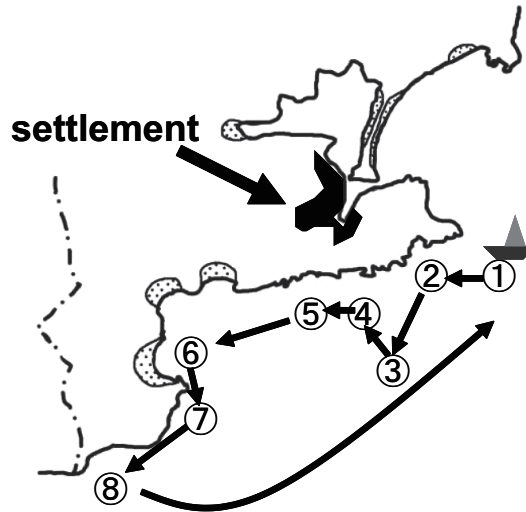


Figure 2 “HONBA” that is the one of the fishing grounds in Okaura village

5. Analysis

These rules seem to have the following three functions. First, is to create and maintain the sense of equality among fishermen. They organize a fishing group and the order of choosing an area by lots. These rules keep fishermen from monopolizing a particular area.

Second, it engenders a sense of cooperation among fishermen. The members of groups change every year. Sometimes fishermen from the same company will be in the same group, but often fishermen have to work with those from other companies. This means they must establish partnerships with others. This system provides opportunities for young fishermen to develop knowledge and skills through sharing with other members. The local fishermen whom I interviewed see cooperation as follows:

“We have to work together. Through the work, we must communicate face to face. There are negative aspects of any partner. However, it is also an opportunity to find out our partner’s good aspects.”

“We give advice to a partner when he or she is in trouble.”

“I feel that I should advise or help my partners when he or she is in trouble with something other than fishing.”

Third, it promotes competition among groups. Each fisherman has his or her own skills and knowledge that should be kept as secret to some extent. This is not easy but they also seem to enjoy these challenging situations and relationships. The competitive spirit is more important than equality

or cooperation for fishermen in order to continue fishing in a tough environment. Local fishermen told me about this as follows.

“By reviewing what was learned from my father, I developed a new idea”

“When I set up my net, I make sure a fisherman is not next to our boat to steal my skills.”

“A large catch is not always good for fishermen. It is sometimes criticized as a practice that is ad hoc or selfish by other fishermen. Some people will say that we fishermen live day by day and are not concerned about the future. But, this is not true at all. Resource depletion and low catch due to over-fishing would immediately trouble us.”

Therefore, the good fisherman should not only have large catches but also able to continue stable catches every year. To be a fine fisherman, he or she must have the foresight to conserve resources in the long term.

6. Conclusion and challenge

In this presentation I have pointed out that rules for communal management in the lobster fishing areas as commons is not only for conserving resources but also to promote relationships within the village and to provide motivation for fishing. Therefore, the issues over commons are not limited to within it but also relate to other issues of that society. We can understand the local relationships within the community and between the fishermen through clarifying the rules of the lobster fisheries.

My current research interest is the future of Japanese FC law and the FCs that developed based on the common law of local fishery communities. While the creation of mega-FCs is currently undergoing, I must carefully pay attention to the management of the commons. At the same time, I must also think about the commons in relation to other issues in marginal areas such as aging and population decline.

References

- Hardin, Garrett, 1968, “The Tragedy of the Commons”. *Science* 162: 1243–1248.
- Inoue, Makoto (eds.), 2008, “Commons-ron no Chosen: Aratana Shigen Kanri wo Motomete [*Challenge for Commons Theory: New Resource management*]”, Shinyosha.
- Ostrom, Elinor, 1990, *Governing the Commons: The Evolution of Institutions for Collective Action*, Cambridge, UK; New York; Melbourne: Cambridge University Press.
- Ostrom, Elinor et al. (eds.), 2002, *The Drama of the Commons: Committee of the Human Dimensions of Global Change*, Washington, D.C.: National Academy Press.
- Suga, Yutaka, 2005, “Commons to Seitousei: “Koeki” no hakken [Managing Legitimacy in Commons: The 300 years history of O River (OOKAWA) in Niigata]”, *Journal of environmental sociology* 11: 22–38, Yuhikaku.
- Torigoe, Hiroyuki, 1997, “Commons no Riyouken wo Kyoujyusuru mono [Who Gets The Most From The Commons]”. *Journal of environmental sociology* 3: 5–13, Shinyosya.
- Yama, Y., Kawada, M., Furukawa, A. (eds.), 2007, *Kankyo Minzokugaku: Atarashii Field gaku he [Environmental Folklore: New Field research]*, Showado.

「サブカルチャー」を「英語」で／「海外」で語ることの意義 —「国際発信能力の涵養」のために—

谷村 要

1. 報告について

本レポートでは、Asia Pacific Week 2010（以下、APW と略記）での報告時の出来事についてまず簡単に記述したうえで、日本のサブカルチャーないしポピュラーカルチャーに関する研究を英語で、さらには海外において語ることの意義を述べる。

他の報告者のレポートにおいても述べられているように、APWでは、さまざまな地域研究のグループに分かれて発表をおこなう。たとえば、日本をフィールドとしているわれわれの場合、Japanese Studies（日本研究）のグループでの発表となる。ただ、報告者の場合、テーマに対して適当なセッションがなかったためか、日本以外の地域研究の研究者と合同で発表するセッション（Crossover Groups）における発表となった。このこと自体、サブカルチャー研究という分野そのものが日本の地域研究において、一つのセッションを形成しうるものではないことを示している。

セッションに名づけられた題は「地域における現代文化（Modern culture in the regions）」。「日本のネット文化を取り扱った本報告（“Video Expression Practice by Internet Users in Japan”）には適合したセッションのように思われる。セッションは中国（China）と東南アジア（Southeast Asia）の研究者とともにおこなった。報告者は二番目に報告をする予定であったが、機器の不具合から最初に発表することになった。

報告内容は、別添の報告原稿にある通り、

2006年以降報告者が調査を続けてきたネット・ユーザーの表現活動（『ハレ晴レユカイ』ダンスオフ会）を事例として、その現実—仮想をこえた活動を描き、その上で、日本の「ソフト・パワー」としてはやされるポピュラーカルチャーの作品群を下支えしているのが、それらのファンの日常実践の中にあることを主張したものである。なお、この報告では、ひとつの挑戦的な試みとして、事例である「ハレ晴レユカイ」ダンスを、映像を流しながら報告者がその場で実際に披露した。はたして受け入れられるか不安な点もあったが、オーディエンスの反応は概ね好意的であったように思われる。

報告後の質疑応答では、報告者の英語能力の不足から APW のスタッフの助けを借りることになりながらも、複数のオーディエンスから 7、8 の質問を受けそれに答えることができた。報告者がこれまで体験した国内の学会と比較しても活発に質問が飛び、その応答にアタフタしつつも、報告後に充実感が残ったことを覚えている。このような充実感を得ることができたのはひとえに GP スタッフとの綿密な事前調整があったおかげである。スタッフにはこの場を借りて深く感謝したい。

さて、そのような事前調整や報告時に得た知見から、サブカルチャーを対象とした研究を〈英語〉で、また〈海外〉で語ることの意義について簡単に述べたい。

2. サブカルチャー研究を、〈英語〉で語る意義

サブカルチャーを取り扱う場合のみの問題で

はないが、現代社会の多様な「文化」を対象とした研究につきまとう一つの困難として、その「文化」のコンテキストをいかにオーディエンスに伝えるか？という問題が挙げられる。「文化」は、それぞれに独特の way of life を内包しており、中にはその「文化」内のみで通じる独特のスラングやコンテキストが存在する。

その多様な way of life の存在こそが、「文化」を研究する意味であり、その魅力でもあるわけだが、しかし、たとえば、あるサブカルチャーをその way of life に寄り添って語っても、その「文化」の外に属するオーディエンス（特に研究者）の理解はむしろ得にくくなってしまう。また、だからといって、社会学的なコンテキストに適合させることを優先してその「文化」を語ることも、「文化」の魅力をそぎ落とすどころか、ある種のバイアスをそこに付与することにすらつながりかねない危険性をはらむ。

ゆえに、「文化」、とりわけサブカルチャーを対象とした研究には、社会学的なコンテキストと「文化」におけるコンテキストの双方を意識しながら論じる「バランス感覚」が必要になる。ましてや、「国際発信」においては、さらにそこに言語や国・地域の差異が関わってくることになり、否が応でもオーディエンスを意識した報告内容を練る必要が出てくる。

そのような視点で改めて自身の研究を英語にしておいていくと、不明瞭な点やより明確に書くべきことが見えてくる。たとえば、これまでは十分な説明がなされていると思っていた箇所に追加の説明を入れたり、あるいは、不要な説明をカットしたりする作業をおこなうことが必要になってくる。このような作業は、もちろん日本語の報告原稿を作成する際にもおこなうことであるが、異なる言語を用いる際はそれがより徹底されたものになりうると感じられた。

先述したように、サブカルチャー研究では、その「文化」に造詣の深い研究報告者とオー

ディエンスとの「ズレ」を常に意識して研究報告をおこなう必要があるが、さらに英語になおすことで一層内容を研磨することになるのではないだろうか。

McLuhan が述べたように、メディアがメッセージの内容に深く関与すると考えれば、「言語」というメディアを変えることで、第一言語では意識できないメッセージの粗を新たに見出すことができているかもしれない。少なくとも、サブカルチャーを対象とした研究（報告者の場合、「ネット文化」や「オタク文化」）に携わる者として、本報告の英語原稿を作成する過程でそのような実感を得ることができたのは確かである。

3. サブカルチャー研究を、〈海外〉で語る意義

また、本報告のもう一つの意義として、日本のサブカルチャーの現在を伝えた際の反応を得ることができたことも大きい。

現地にてお世話になった The Australian National University の日本人留学生から聞いた話であるが、海外では日本のポピュラー文化への関心が高いにもかかわらず、それに関して論じた研究はほとんどないため、あちらの日本研究者としてはその手の話に「飢えている」のだという。本報告に対しても熱心に聞き入る現地の研究者も少なからず存在しており、報告後にはそのような研究者らと交流を深めることができた。以上のように、研究者のネットワークを築くことができたのはもちろん、海外においてこのテの研究に「需要」があることを確認できたことは今後の研究の励みになった。

日本のサブカルチャーに関する研究は、未だ評価が一様ではない面がある。その状況においては、評価を受ける場を積極的に見つけていくことも、駆け出しのサブカルチャー研究者にとっては必要となる。その際、この APW のような場—サブカルチャー研究に「飢えている」

場—に積極的に自身の研究を披露することには大いに意義があるのではないだろうか。

「国際発信能力の涵養」は本 GP プログラムの柱のひとつであるが、その「涵養」のためには「国際発信」の意義を共有していくことも重要となる。本レポートがその意義を共有し、今後に引き継いでいくのに少しでも寄与できれば、それに勝る喜びはない。

Video Expression Practice by Internet Users in Japan

Kaname Tanimura

Outline:

1. Purpose of this Study
2. Background: Technological Innovation on the Internet
3. What is “Hare Hare Yukai” Dance?
4. The Process of Offline Gathering for Dance
5. Discussion

1. Purpose of this Study

Since the mid-2000s, Web2.0 technology has given internet users more options for media expression. As a case study, I have chosen the offline gatherings of the “Hare Hare Yukai” dancers.

The purpose of this presentation is to consider the structures that are created through the interaction between “real-space” and “cyber-space”.

2. Background: Technological Innovations on the Internet

In the first half of the 2000s, Japanese Internet adoption increased dramatically. According to the Ministry of Internal Affairs and Communications survey data, Internet adoption in Japan rose from 37.1% of the population in 2000 to 70.8% in 2005¹. Around the same time, Web2.0 technologies were developed.

The technical innovations are symbolized by two kinds of online services. One of the services is video sharing websites. According to a *Netratings Japan* survey, the number of users of YouTube in Japan exceeded 19 million in March 2009². The spread of video sharing websites gives Internet users opportunities to create rich content such as movies and music.

The other service is social networking service (SNS) websites. Electronic bulletin boards and SNS have led the proliferation of such Internet-based social networks. Internet users in Japan frequently hold “*Ofukai*”³ (Offline meeting, オフ会)” by these services. The SNS website “mixi” is the most

1 <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/statistics05b1.html>

2 http://csp.netratings.co.jp/nnr/PDF/Newsrelease04232009_J.pdf

popular SNS in Japan. The number of users is over 25 million⁴. One of this website's features is that membership is invitation-only. It is not possible to join if there is no invitation from a current member. In this respect, it is different from My Space and Facebook. A relationship in real-space is needed to participate in communities on "mixi".

3. What is "Hare Hare Yukai" Dance?

In Japan these technological innovations have brought about specific Internet sub-cultures. One is offline gathering for dancing. Especially, the popular dance in 2006 is "Hare Hare Yukai" Dance ("Haruhi Dance").

"Hare Hare Yukai" is the ending theme song of the 2006 television anime "The Melancholy of Haruhi Suzumiya" (涼宮ハルヒの憂鬱, Suzumiya Haruhi no Yūtsu). "Melancholy" has been immensely popular among Japanese anime fans. This popularity has spread to overseas anime fans. According to a Japanese newspaper⁵, overseas sales of the anime's DVD are higher than that of Japan.

In the ending credits, the characters perform a dance accompanying the ending theme song.

Since the broadcasting of this anime, many fan-made videos imitating the animated choreography have been uploaded to video sharing websites. Many performers gather in real-space after communication on electronic bulletin boards or SNSs.

Let's follow the process of these offline gatherings for dancing to find out how this phenomenon has occurred.

4. The Process of Offline Gathering for Dance

4.1 The notification of offline gatherings

First, an announcement for an offline gathering is posted to electronic bulletin boards or SNSs by the organizer. Picture. 1 and Picture. 2 show the announcement of an offline gathering that was held on May 20, 2006. The announcement on the left was for 2channel (2ちゃんねる, *ni channeru*) and the one on the right was to mixi.

Internet users who want to participate in the offline gathering post messages to the bulletin board.

4.2 Practice and make videos

Next, they gather in real-space in places such as a park or the street. In many cases, they practice dancing first, and make the video afterwards. When the participants meet for practice, they exchange

3 Galbraith (2009) described "*Ofukai*" as follows. "Offline Meeting. Meeting people you normally deal with online in an offline, face-to-face context. Among OTAKU, this usually occurs in groups at events." In this report, offline gathering is the same in meaning as "*Ofukai*".

4 The count is available at "mixi counter" (mixi カウンター, <http://s.hamachiya.com/mc/>).

5 「角川, ユーチューブ積極活用 映画・アニメ世界に発信」(Kadokawa, actively utilizing YouTube) (『日経産業新聞』(*Nikkei Industrial Journal*), 28 Jan. 2008)

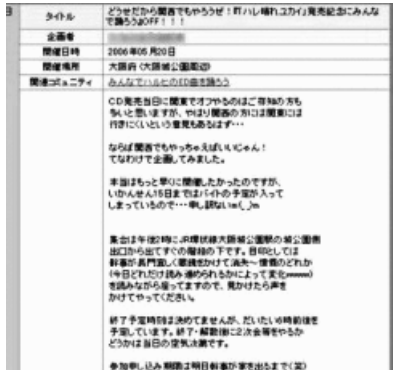


Figure 1 mixi

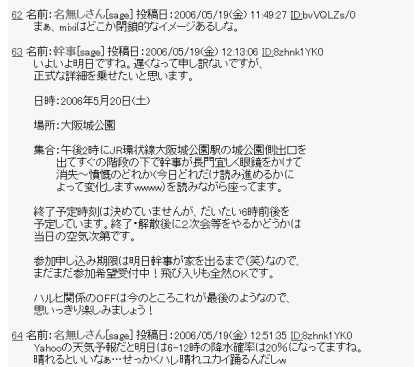


Figure 2 2 channel

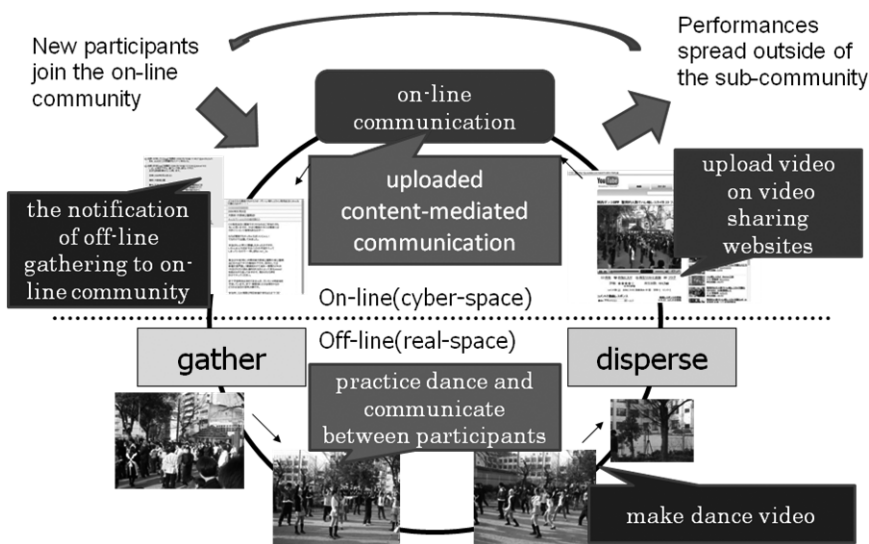


Figure 3 The process of offline gathering for dance

their online user names and deepen relations. This is one of the attractions of offline gathering for dance. Many of the participants want to meet peers with the same interests.

4.3 The continuance of relationships in cyber-space

After making the video, the offline gathering is dispersed. However, their relationships continue online. Participants discuss their memories and experiences of the offline gathering on electronic bulletin boards or SNSs.

Moreover, they post their dance video to the video sharing websites.

Through the posted dance video, other Internet users learn about the offline gatherings for dance. They also learn the dance from watching the video. Anime fans outside of Japan learn about and participate in the dance. A recent search on YouTube in Japanese and English brought up over 10,000 Hare Hare Yukai dance related postings.

4.4 The interaction between “real-space” and “cyber-space”

Offline gathering for dance progresses through the following processes.

First, an announcement for the offline gathering is posted on cyber-space. Next, participants practice the dance and make a dance video in real-space. The relationships created during the offline gathering are continued in cyber-space.

Uploading videos on video sharing websites spreads the dance beyond the sub-community. Participants maintain relations with each other through online communications. In this regard, the uploaded content helps to continue communications. The continuance of online communication leads to the next gathering and also attracts new participants to the gathering. Offline gatherings for dance cross cyber-and real-space.

5. Discussion

From the case, we can observe the following features. User-generated content such as dance videos can be introduced to a wider audience through video sharing websites. Visual media can convey information across language barriers; leading to the expansion of online communities of interest that transcend geographical and national barriers.

User-generated content can also strengthen the bonds between members of online communities. Online communication encourages community members to create user-generated content.

This paper focused on the activity of Internet users based on knowledge acquired from participant observation. However, the social influences and effects of such activities are not thoroughly discussed. I plan to study these influences and effects in future studies.

Japanese pop culture, including the “Haruhi Dance”, is often discussed in terms of Japan’s increasing soft power; however, it is more interesting to focus on the spread of offline gatherings for dance as everyday activities by anime fans. (e.g. participant observation)

References

- Galbraith, P. W., 2009, *The Otaku Encyclopedia*. Kodansha International Ltd.
- Iwabuchi, K. (岩淵功一), 2001 『トランスナショナル・ジャパン——アジアをつなぐポピュラー文化』岩波書店 (=2002 *Recentering Globalization: Popular Culture and Japanese Transnationalism*. Duke Univ Pr.).
- , 2007 『文化の対話力—ソフト・パワーとブランド・ナショナリズムを越えて』、日本経済新聞出版社。
- McGray, D., 2002, “Japan’s Gross National Cool”. *Foreign Policy*. 130 (May/June 2002) pp.44–54. Carnegie Endowment for International Peace.
- Nye, J. S., Jr., 2004 *Soft Power: The Means to Success in World Politics*. Public Affairs.
- Tanimura, K. (谷村要), 2008 「インターネットを媒介とした集合行為によるメディア表現活動のメカニズム—「ハレ晴レユカイ」ダンス「祭り」の事例から」(The mechanism of the media expression activities by the set act through the Internet: Based on a example of “Hare-Hare Yukai” Dance “MATSURI”). 『情報通信学会誌』(*Journal of Information & Communication Research*). No. 85, pp. 69–81.